

長岡市埋蔵文化財調査報告書

# 抜間遺跡

—県営経営体育城基盤整備事業（富島地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015

新潟県長岡市教育委員会

## 例 言

- 本書は、新潟県長岡市富島町地内に所在する抜間遺跡の発掘調査報告書である。
- 調査は、県営経営体育成基盤整備事業（富島地区）に伴うものであり、平成17年度に長岡市教育委員会が確認調査を行い、本発掘調査は平成25年度に、長岡市が新潟県長岡地域振興局から委託を受けて実施した。
- 確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫及び県費の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は、原因者である新潟県長岡地域振興局が費用の95%を負担した。また、長岡市が費用の5%を負担し、国庫及び県費の補助交付金を受けた。
- 遺物の注記は、「NGM」の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
- 本書の執筆・編集はすべて調査担当が行った。「第V章 自然科学分析」については、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った自然科学分析の報告書を調査担当が抜粋・編集した。
- 調査・整理体制は以下のとおりである。

### 平成25年度 本発掘調査

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）  
事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 山川茂人）  
調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主査 烏居美栄  
現場代理人 稲垣信哉（株式会社大石組）  
調査補助員 遠藤昌代（株式会社大石組）

### 平成26年度 整理作業

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）  
事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 小熊博史）  
整理担当 長岡市教育委員会科学博物館 主査 烏居美栄  
整理補助員 浅野秋子（株式会社大石組）

- 発掘調査で出土した遺物及び、測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。
- 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

富島地区護墳整備協議会 富島町町内会

## 目 次

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡周辺の環境	2
第Ⅲ章	調査の方法と経過	3
第Ⅳ章	調査の成果	4
第Ⅴ章	自然科学分析	7
第VI章	まとめ	13
参考文献		

## 挿図・表目次

第1図	遺跡の位置	図版1 遺構全体図・遺構分割図	図版9 遺物実測図（2）
第2図	周辺の遺跡	図版2 遺構個別図（1）	図版10 遺物実測図（3）
第3図	調査区位置図及び 基本層序	図版3 遺構個別図（2）	図版11 調査状況写真（1）
第1表	遺物観察表	図版4 遺構個別図（3）	図版12 調査状況写真（2）
		図版5 遺構個別図（4）	図版13 遺物写真（1）
		図版6 遺構個別図（5）	図版14 遺物写真（2）
		図版7 遺構個別図（6）	図版15 珪藻化石・花粉化石写真
		図版8 遺物実測図（1）	

## 図版目次

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成16年4月、長岡市農林部（以下「市農林部」という。）から長岡市教育委員会（以下「市教委」という。）に、富島町におけるほ場整備事業計画地内の埋蔵文化財の有無についての問合せがあった。計画地は「八丁沖」と呼ばれる低湿地だった地域にあたり、計画地内に周知の遺跡は所在していなかった。しかし、市内においても沖積地における遺跡の確認例が増えつつあり、分布調査を実施した。その結果、抜間遺跡を含む7遺跡を新たに発見した。市教委は、ほ場整備事業の主体者である新潟県長岡地域振興局農林振興部（以下「事業者」という。）及び市農林部に調査結果を伝えた。協議の結果、平成17年の稲刈り後に7遺跡の確認調査を実施することで合意した。

平成17年10月の確認調査により、抜間遺跡では土坑、柱穴などの遺構や9世紀の須恵器、土師器が出土した。また、分布調査の結果からは遺跡は深い位置にあると推測されていたが、ごく浅い位置にあることが判明した（市教委 2006）。

事業者は、調査結果を受けて埋蔵文化財に影響を与える範囲を減らすように設計内容の調整を行った。その設計内容を基に市教委と事業者は協議を行い、抜間遺跡については、排水路部分を本発掘調査対象地とすることで合意した。ほ場整備事業は平成20年4月に正式採択され、事業に伴って4遺跡（浅田遺跡、五百刈遺跡、抜間遺跡、首田遺跡）の発掘調査が必要であったが、各遺跡の発掘調査実施年度については、ほ場整備の進捗と随時調整することとなった。平成24年秋、抜間遺跡周辺において平成25年春からの着工見込みとなり、発掘調査を平成25年度に、翌年度に整理作業及び報告書の刊行を行うこととなった。

市教委は、平成25年9月25日付け長教博第246号で県教育委員会教育長に対し文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査の着手を報告し、本発掘調査を開始した。



第1図 遺跡の位置 (1/50,000)

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

### 1 遺跡の位置

抜間遺跡は、新潟県長岡市富島町に所在する（第2図1）。

長岡市域のほぼ中央を信濃川が南から北へと流れ、その両岸には沖積平野が広がる。右岸沖積地の東側に東山丘陵が南北に延びる。東山丘陵から信濃川へ沖積地を横切るように太田川、栖吉川などの中小河川が流れ、山裾から沖積地にかけて谷口扇状地を形成している。沖積地は中小河川などからの氾濫水や雪解け水などが湛水しやすく、かつては広大な湿地や潟が存在していた。遺跡が所在する富島町は、かつて「八丁冲（八町潟）」と呼ばれた低湿地の南端に位置し、現在の富島集落は自然堤防上に営まれている。抜間遺跡は富島集落の北東方向約700mの水田中に所在しており、周辺の標高は16m前後である。

### 2 周辺の遺跡

信濃川右岸においては、東山丘陵沿いの段丘上や台地上、扇状地などに遺跡が多く分布する。近年は沖積地における遺跡の確認例も増えてきているが、丘陵沿いに比べるとその分布は希薄である。

绳文時代には茨崎遺跡（第2図2）や堂ヶ峯遺跡（3）など、丘陵裾や段丘上、扇状地に遺跡が分布する。弥生時代では環濠集落である横山遺跡（4）、墳丘墓が確認された藤ヶ森遺跡（5）など後期の遺跡が丘陵裾に営まれ、沖積地においても五百刈遺跡（6）が確認される。古墳時代になると、丘陵上に麻生田古墳群（7）、七ツ塚古墳群（8）が造営され、沖積地内に五斗田遺跡（9）、長表遺跡（10）などの集落が営まれるが、それらの集落が古墳造営に関わる集団のものかは明らかではない。

古代には丘陵裾や低位段丘上、沖積地内に集落が営まれる。間野窓跡（11）などの8世紀代の須恵器窓跡が東山丘陵沿いに複数所在するが、奈良時代の集落遺跡は少ない。平安時代になると、大原C遺跡（12）など丘陵裾の集落や、火焚面遺跡（13）、盲田遺跡（14）、五百刈遺跡など沖積地内の集落が所在する。

富島館跡（15）は、堀や土塁を持つ戦国時代の館跡と推測されるが、宅地化により詳細は不明である。



第2図 周辺の遺跡 (1/75,000)

### 第Ⅲ章 調査の方法と経過

#### 1 調査区の設定

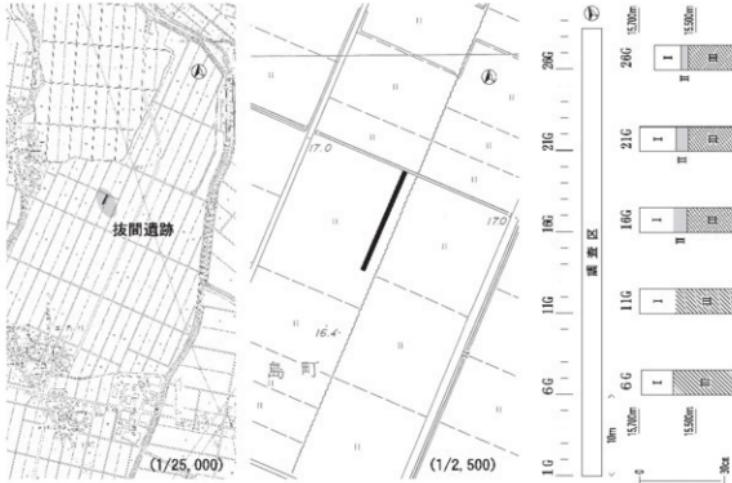
確認調査の結果を基に、排水路が敷設される箇所の幅2.4m、延長55mを調査対象地とした。調査区の南端を0mとして10m間隔に杭を打ち、その中をさらに2m単位に区切って、南端の1Gから北端の28Gまでグリッドを設定した。遺物の取上げ位置、遺構の位置を表す場合、このグリッドを使用する。

#### 2 調査の経過

平成25年9月26日、調査区の南端から重機により表土剥ぎを行った。遺跡が浅いことから重機の下に敷鉄板を入れて作業を進めた。4～8G付近は耕作土直下において部分的に地山層が現れ、地山面に耕耘機の痕跡も見られた。27日から作業員が入り、層序確認用サブトレンチの掘削を行った。1～3G付近の表土直下からの落込みの存在や、調査区北半は南半に比べて遺物包含層が残っていることなどを確認し、4G付近から包含層の掘削と遺構精査を開始した。10月1日に包含層掘削と遺構精査が終了し、遺構発掘を開始した。1～3Gの落込みは上層は遺物が希薄であったが、サブトレンチにおいて、須恵器・土師器がやや多く出土し、平安時代の遺構として掘り下げた。4日にラジコンヘリによる空中写真撮影、自然科学分析のための土壤採取を行った。5日に遺構完掘、測量を行い、現地における調査を終了した。

#### 3 基本層序

調査地の現状は水田であり、標高は15.7m前後である。基本層序はⅠ～Ⅲ層に区分できる。Ⅰ層：暗褐色粘土（水田耕作土）、Ⅱ層：暗灰色～灰褐色粘土（平安時代の遺物包含層）、Ⅲ層：黄灰色～灰褐色シルト（地山）である。なお、20G付近から北のⅢ層はやや粘土質になる。



第3図 調査区位置図及び基本層序

## 第IV章 調査の成果

### 1 遺構

今回の調査で検出された遺構は、溝状遺構（SD）25基、土坑（SK）9基、その他の遺構（SX）3基である。調査区の中央付近で遺構の分布が希薄である。主な遺構について述べる。

#### (1) 溝状遺構（図版2～5）

調査区の中央付近では溝状遺構の分布が希薄になるが、南半と北半において、それぞれ複数の溝状遺構が平行に並んで検出された。南半の溝状遺構群と北半のそれとでは、軸方向や規模に若干違いがみられる。南半の溝状遺構の多くは北西～南東方向の軸方向で、幅0.3m前後のものが多く、北半のものは北西～南東方向、幅0.7m前後のものが多い。溝と溝の間隔も北半のものの方がやや広い傾向がある。

SD01 4G～5Gに所在する。北西～南東方向に直線状に伸び、北西側は調査区外へと続く。確認された規模は幅0.36m、長さ2.92m、深さ0.12mを測る。断面は弧状である。覆土の大部分は灰褐色粘土と地山土である黄褐色粘土・シルトがブロック状に混ざり合い、炭化物を少量含む。SK01を切る。土師器・須恵器を少量出土する。

SD04 6Gに所在。北西～南東方向に直線状に伸び、両端が調査区外へと続く。断面は台形を基本とするが、一部深い箇所はV字状を呈する。確認された規模は幅0.3m、長さ2.92m、深さは全体的には0.12mであるが、一部深くなる箇所は0.26mである。SD07に切られる。土師器をごく少量出土する。

SD05 6G～7G検出。北西～南西方向に伸びる。規模は幅0.28m、長さ1.08m、深さ0.08m。SD04とSD06との間に位置する。SD07に切られる。断面は弧状を呈する。土師器をごく少量出土。

SD06 6G～7G検出。北西～南東方向に直線状に伸び、両端は調査区外へと続く。確認された規模は幅0.28m、長さ3.14m、深さ0.07mを測る。断面は台形である。SD04と平行し、SD07に切られる。須恵器を少量出土する。

SD07 6G～8Gに所在する。北東～南西方向に直線状に伸びる。南西側は調査区外に続く。確認された規模は0.36m、長さ3.66m、深さは0.12mを測る。断面は台形。SD04、SD05、SD06、SD08を直行するように切る。直径約15cmのピット状の落込みが2箇所確認された。土師器を出土する。

SD08 7G～8G検出。北西～南東方向にほぼ直線状に伸び、両端が調査区外へと続く。確認された規模は幅0.38m、長さ3.18m、深さは0.09m。断面は台形である。SD07に切られる。土師器を出土。

SD09 9G検出。北西～南東方向に直線状に伸びる。規模は幅0.40m、長さ2.46m、深さは0.15mを測る。断面は台形である。土師器・須恵器を少量出土する。

SD12 11Gに所在する。ほぼ東西方向に直線状に伸び、東側は調査区外へと続く。調査区内では幅0.4mで平行に伸びるが、調査区東壁面において幅0.64mに広がる。確認された長さは1.0m、深さ0.04m。断面は台形である。石製品（櫛）1点を出土。

SD14 15G検出。東西方向に伸び、西側は調査区外へと続く。確認された規模は幅0.25m、長さ0.36m、深さは0.05mを測る。断面は台形である。SD15を切る。出土遺物なし。

SD15 15G検出。南北方向に伸び、北側は調査区外へと続く。確認された規模は幅0.23m、長さ1.12m、深さ0.05m。SD14に切られる。出土遺物なし。

SD18 20G～22Gに所在する。北北西～南南東に直線状に伸び、南南東側は調査区外に続く。幅0.74

m、確認された長さは3.84m、深さ0.17~0.28mを測る。断面は弧状。覆土の上層は暗灰褐色粘土、黄褐色粘土、灰褐色粘土が薄くレンズ状に堆積し、炭化物を多く含む層が入る。土師器を少量出土。

SD21 24G検出。北北西~南南東に伸び、北北西側は調査区外に続く。確認された規模は幅0.4m、長さ1.34m、深さ0.09m。断面は浅い皿状である。出土遺物なし。

SD24 25G~26G検出。北北西~南南東に直線状に伸び、両側は調査区外へと続く。確認された規模は幅0.76m、長さ3.92m、深さ0.2mを測る。断面は弧状を呈する。暗灰褐色粘土、黄褐色粘土、灰褐色粘土が薄く堆積し、炭化物を多く含む層もある。出土遺物なし。

SD25 26G~28Gに所在する。北北西~南南東に直線状に伸び、両側は調査区外へと続く。確認された規模は幅0.6m、長さ4.24m、深さ0.14mを測る。断面は弧状を呈する。暗灰褐色粘土、黄褐色粘土、灰褐色粘土、炭化物を多く含む層が薄く堆積する。少量の土師器、須恵器を出土する。

### (2) 土坑 (図版6・7)

SK01 4G検出。平面は橢円形であるが、東側部分が調査区外に続く。確認された規模は、長軸1.64m、短軸1.28m、深さ0.16mで、断面は浅い皿状である。SD01に切られる。多くの土師器、須恵器を出土する。

SK02 4G検出。平面はやや不整形な方形であり、西側部分が調査区外に続く。確認された規模は長軸1.28m、短軸0.84m、深さ0.52mで、断面は台形を呈する。土師器、須恵器を出土する。

SK04 5Gに所在する。長軸0.76m、短軸0.6mの円形の土坑である。深さ0.16mで断面は弧状を呈する。土師器を出土する。

SK05 8G~9Gに所在する。平面はやや不整形な方形。長軸1.36m、短軸0.84mを測る。断面は一部階段状となる台形である。深さ0.22m。須恵器を出土する。

SK06 11G検出。やや不整形な橢円形の平面で、西側部分が調査区外に続く。確認された規模は、長軸1.68m、幅0.8m、深さ0.15m。断面は皿状を呈する。土師器、須恵器を出土。

SK07 12G~13Gに所在する。長軸0.56m、短軸0.48mの円形の平面である。深さ0.08m、断面は浅い皿状を呈する。土師器を出土する。

SK08 2G検出。3GからSK03に続くなだらかな斜面の途中にある。平面はやや不整形な円形で、東側部分が調査区外に続く。確認された規模は、長軸0.6m、短軸0.33m、深さ0.16m。断面は台形である。出土遺物なし。

SK09 2G検出。SK08と同じく、3GからSK03へのなだらかな斜面において確認した。東側部分が調査区外へと続く。確認された規模は長軸0.97m、短軸0.52m、深さ0.09mで、断面は浅い皿状である。土師器、須恵器を出土する。

### (3) その他の遺構 (図版7)

SX03 1G~2G検出。自然流路跡と見られ、北岸側のみ確認した。3GのI層直下から南に向かってなだらかな落込みがあり、1~2Gにおいて急激に深くなり、調査区外へと続く。急激に落ち込んだところから南部分をSX03とした。確認された幅は、調査区西壁で3.28m、調査区東壁で1.64m。落込みが急になることが確認された地点からの深さは0.38mであるが、I層直下からの深さは0.62mである。土師器、須恵器、木製品、自然木、木の実を出土した。

## 2 遺物

出土した遺物は、平安時代の須恵器、土師器が合わせてコンテナ詰めで4箱、石製品（礫、被熱礫）、木製品が出土した。そのほかに近世以降の陶磁器片少量、土人形、キセルが出土した。須恵器、土師器はほとんどが小片であり、図化できる資料は多くない。

### (1) 須恵器・土師器（図版8～10）

- SD07 土師器の鍋（1）が出土した。口縁部が「く」の字状に外反する。
- SD19 土師器長甕の胴部片（3）が出土。外面に平行タタキ目、内面には同心円當て具痕が残る。
- SD25 須恵器の壺（4）が出土。薄手の作りでロクロ目が深い。
- SK01 須恵器と土師器を出土しており、遺物の残存状況は比較的よい。5は須恵器の無台壺、6は甕の胴部破片で外面に平行タタキ目、内面に同心円當て具痕が残る。7は土師器の小甕底部であろう。平底であるが、摩滅により切り離しは不明である。8は甕口縁部、9は長甕の胴部破片である。
- SK02 須恵器は無台壺（10）が出土した。土師器は甕（11）、小甕（12）が出土した。11は口縁部が「く」の字状に外反し、体部の内外面ともにカキ目、ハケ目を施す。12は口縁端部を内側につまむ。
- SK06 須恵器の壺蓋（13）、土師器の無台壺（14）が出土した。13は扁平な宝珠形のつまみを持ち、口縁部が下方に折れる。外面に漆が付着しているが文字や記号としての判読はできない。14は壺部が緩く内湾して立ち上がり、底部は回転ヘラ切りである。
- SK09 須恵器の壺蓋（15）が出土した。口縁部が下方に折れる。つまみを欠いている。
- SX03 遺物の残存状況は比較的良好。須恵器の壺蓋（16）、有台壺（17・18）、無台壺（19・20）、土師器の壺（21）、小甕（22）が出土した。16は宝珠形のつまみを持ち、器壁が厚い。また、焼垂みがあり、降灰がある。17は底部回転ヘラ切りの壺に断面方形の高台を貼り付ける。18は壺身の深さが4.8cmあるが、このほかの須恵器壺の壺身の深さは3.5cm前後であり、18のみ深い壺部を持つ。高台の断面は方形で内端接地である。19・20は底部回転ヘラ切りの無台壺で、20は底部外面を転用視として利用している。21は底部回転糸切りの無台壺で、口縁部にススが付着する。22はほぼ全形を残す資料である。底部は平底で体部は丸みを帯び、口縁部が「く」の字状に外反する。口縁端部は丸く收める。
- 遺構外出土 須恵器の壺蓋（26）は、小形の扁平な円形のつまみを持つ。27・28は須恵器の甕胴部破片である。土師器では小甕（29）、長甕（30～32）、鍋（33）が出土した。29は平底の底部片であり、外面下方にケズリを施す。30～32は「く」の字状に外反する口縁部で、調整は内外面ともにロクロナデのみである。33は端部をつまみ上げる。梢円形にゆがむ。

### (2) 石製品（図版8）

2はSD12から出土した礫である。底面となるような平らな面があり、上部分は欠損している。石材は安山岩である。用途は不明である。このほかには、削れた礫が13Gから1点、被熱し削れた礫の破片が9G、10G、13G、15G、17GのII層から1点ずつ出土している。

### (3) 木製品（図版9）

図化した木製品3点（23～25）は全てSX03からの出土である。23は左右が折損しているが、曲物底板とみられる。柾目材を用いる。24は芯持丸太を用いた杭で、先端を尖らせ、上部は折損する。25は直柄平鍬の身で、縦方向に約半分を折損する。

## 第V章 自然科学分析

抜間遺跡における古代及びその前後の古環境、特に堆積環境や古植生の検討を目的として、珪藻分析・花粉分析を、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して実施した。

### 1 試料

試料は、調査区内3箇所（1G東壁・南端、SD19）より採取した土壌5点である。

#### (1) 1G東壁

本地点は、調査区南端の凹地部に相当する。観察対象とした堆積層の層厚は約78cmを測る。本地点では、褐灰～灰褐色泥（d層）とそれより下位を対象とし、計7点の土壌試料（試料番号1～7）を採取している（図1）。

#### (2) 1G南端

本地点は、1G東壁地点の南側、U字溝敷設に伴う掘削により露出した土層断面に対応する。この土層断面では、1G東壁地点の遺物包含層相当より以深の堆積層を観察の対象としており、層厚は約60cmを測る。本地点では、1G東壁の遺物包含層相当（f層：試料番号1）および同地点の（青）灰色泥（g層）下位にあたる（褐）灰色泥（試料番号2）より土壌試料を採取している（図1）。

#### (3) SD19

SD19は、調査区北部より検出された北西～南東方向を長軸とする小溝群の一つに相当する。観察対象とした堆積層の層厚は約35cmを測る。本地点では、1G東壁のd層に対比されると考えられた層とその下位の堆積層を対象に土壌試料（試料番号1～3）を採取した。なお、試料番号3については、色調や混入物の状況から上部（I）、中部（M）、下部（L）と分けて採取したため、土壌試料は5点となる（図1）。

本分析では、上記した分析目的から古代の遺物包含層とその上位・下位に相当する土壌試料4点（1G東壁 試料番号1・4・6、1G南端 試料番号2）と、発掘調査所見などから生産遺構と推定される小溝における栽培植物の検討を目的として、小溝埋土に相当する土壌試料1点（SD19 試料番号3 U）を選択し、後述する各種分析に供した。

### 2 分析方法

#### (1) 珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体

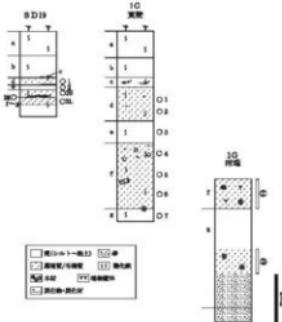


図1 各地点の模式柱状図及び  
試料採取位置

以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

#### (2) 花粉分析

試料約10 gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（奥化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による氷物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980a）等を参考にする。

また、今回の調査では、栽培種のイネ属の産状についても着目した。イネ属については、検出されるイネ科花粉の表面微細構造、発芽孔の肥厚状況、粒径などを考慮し、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。

### 3 結果

#### (1) 硅藻分析

結果を表1、図2に示す。分析試料中に含まれる珪藻化石の絶対量は、全体に多いとは言えないものの、5試料中3試料から堆積環境を推定する上で最低限必要な100個体以上が検出された。化石の保存状態は、1G東壁の試料番号4・6および1G南端の試料番号2は、半壊した殻が多いものの、溶解の痕跡が認められないことから、状態は平均すると不良である。1G東壁の試料番号1およびSD19の試料番号3Uは半壊しているだけでなく、一部の個体に溶解の痕跡が認められることから、極不良である。

##### 1) 1G東壁・南端

1G東壁の試料番号1は、堆積物中に含まれる珪藻化石の量が少なく、1プレパラートから検出された個体数は63個体である。認められた群集は、淡水生の湿地性あるいは沼澤湿地性の種群である。また、極々低率に海水生種も認められた。

試料番号4には、ある程度の量の珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。認められた分類群は、淡水生種のみであり、海水生種あるいは汽水生種等は認められない。

試料番号6でも、ある程度の量の珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。認められた分類群は、淡水生種を主として、極々低率に淡水～汽水生種および海水～汽水生種を伴う種群で構成される。

南端の試料番号2にも、ある程度の量の珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。認められた分類群は、淡水生種を主として、極々低率に汽水生種を伴う種群で構成される。

##### 2) SD19

試料番号3Uは、堆積物中に含まれる珪藻化石の量が少なく、1プレパラートから検出された個体数は21個体であり、淡水生の保存不良の湿地性と思われる種群が極低率に認められたのみである。また、極々低率に海水生種も認められた。

#### (2) 花粉分析

結果を表2、図3に示す。花粉化石の産状は、地点・試料により異なる。

##### 1) 1G東壁・南端

表 1 珍基分析結果

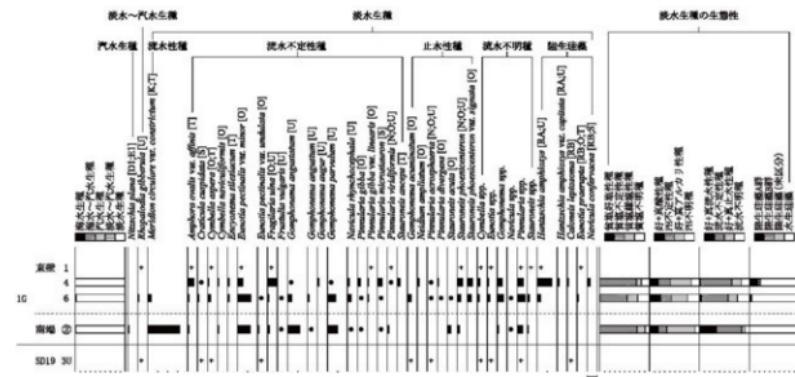


圖 2 主要珪藻化石群集

表2 花粉分析結果

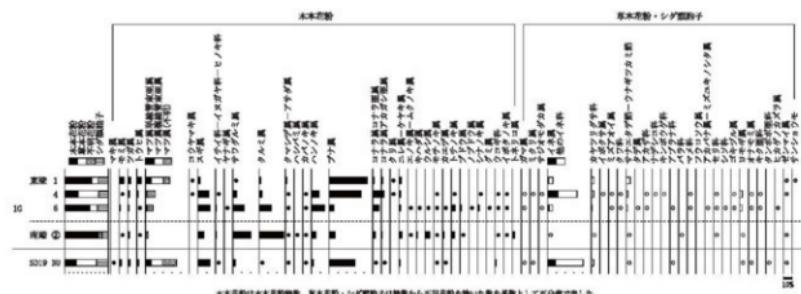


圖 3 花粉化石群集

1 G 東壁の試料番号 1・4・6 は、化石の保存状態はやや悪いが、豊富に産出する。試料番号 1 は、他の 2 試料と比較して産出個体数が少ないものの、木本花粉の出現率が高く、マツ属、ブナ属が多産する。草本花粉は少いながらもイネ属を含むイネ科、カヤツリグサ科などが産出する。

試料番号 4 は、草本花粉の出現率が高い。木本花粉は、ブナ属が最も多く産出し、マツ属、スギ属等を伴う。草本花粉は、イネ科が優占し、栽培種のイネ属も多く産出する。イネ科全体におけるイネ属の割合は約 38.7% である。この他、カヤツリグサ科、サンエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属等を伴い、水湿地生のガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属等も認められる。

試料番号 6 は、木本花粉の出現率が高く、スギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属等が多く産出する。草本花粉は、イネ属を含むイネ科、カヤツリグサ科、サンエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属等が産出し、ガマ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属等の水湿地生草本も産出する。

1 G 南端の試料番号 2 は、化石の保存状態が良好で、産出個体数も多い。花粉化石群集は木本花粉が優占し、サワグルミ属、クルミ属が多産する。草本花粉は非常に少なく、イネ属を含むイネ科、カヤツリグサ科、サンエタデ節—ウナギツカミ節、バラ科、セリ科、ヨモギ属が、1~2 個体産出した程度である。

## 2) SD19

試料番号 3 U は、化石が豊富に産出するが、保存状態はやや悪い。花粉群集組成では草本花粉の出現率が高く、イネ科が優占する。イネ科には栽培種のイネ属が認められ、その割合は約 22.2% である。その他、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属等を伴い、水湿地生のガマ属、ミクリ属なども産出する。木本花粉は、マツ属、スギ属、ブナ属が多く産出し、モミ属、ツガ属、トウヒ属、サワグルミ属等を伴う。

## 4 考察

### (1) 堆積環境

分析対象とした試料の中で最下位に相当する 1 G 南端の g 層（試料番号 2）については、多産種の産状と希産種を合わせた群集の構成を考え合わせると、堆積時は、基本的には低地部の湿地のような環境下にあったものと推定されるが、中～下流河川指標種が多産したことからすると、本層堆積時は、遺跡周辺を流下する周辺河川から、一時的に河川水の影響を受けたものと推定される。

1 G 東壁の f 層下部（試料番号 6）から検出された種群は、沼澤湿地あるいは湿地性の種群と陸生珪藻に属する種が主体である。そのため、本層堆積時は、基本的には低地部の沼澤湿地～湿地の環境下にあったものと推定され、前述の g 層ほどではないものの流水の影響もあったと思われる。

f 層上部（試料番号 4）において検出された種群は、そのほとんどが湿地性の種群と陸生珪藻の範疇に属する種である。そのことを考慮すると、本層堆積時は、基本的には低地部の湿地の環境下にあったものと考えられるが、地下水位は低く好気的な場所が多かった可能性が示唆される。

d 層上部（試料番号 1）では、珪藻化石の産出率が特に低いために、堆積環境を言及することは難しい。本層から低率に検出された種群は、そのほとんどが止水性で湿地性の種である。群集の構成と産出率が低いことを考慮すると、堆積時は基本的には広範な水域であったとは考えにくく、水の影響が少ない好気的環境下にあった可能性が考えられる。なお、海水生種は、絶滅種を含み、保存状態が淡水生種とは異なることから、新第三系からの二次化石と考えられる。これらのことから、本層準の堆積物は、河川の氾濫等による一過性の堆積によってもたらされた可能性が示唆され、堆積速度も早かつた可能性がある。

一方、SD19 の試料番号 3 U は、化石の産出率が低いこと、化石の保存状態が極不良などの特徴から、好

気的環境下（大気に曝された状態）にあった可能性が示唆される。

### （2）古植生

1 G 南端の試料番号 2 と東壁の遺物包含層下部（f 層：試料番号 6）は、木本花粉の出現率が高い。珪藻分析結果による堆積環境では、これらの試料については河川水の影響が示唆されていることから、周囲の河川沿いや集水域の植生を反映していると考えられる。東壁の f 層下部（試料番号 6）では河川水の影響が弱まっていることが推定されていることから、局地的な植生も反映していると考えられる。なお、遺物包含層から出土した木材の一部については樹種同定が実施されており、キハダ、ヤマグワの 2 種が確認されている。これらの状況から、遺跡周辺にはサワグルミ属、クリミ属をはじめとして、渓畔林や河畔林を構成する種を含むクマシデ属ーアサダ属、コナラ属コナラ亜属等、河畔林や湿地林を構成する種を含むハンノキ属やトネリコ属、沢沿いや湧水部などの適湿地に林分を形成したと思われるスギ属などの河畔林・林縁要素からなる林分が分布したと考えられる。f 層下部（試料番号 6）相当の遺跡周辺には湿地が分布し、ガマ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属や、イネ科、カヤツリグサ科、セリ科の一部が生育したと考えられる。また、やや乾いた場所にはサンエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属等も生育していたと考えられる。

1 G 東壁の遺物包含層上部（f 層：試料番号 4）は、草木花粉の出現率が高く、イネ科の多産を特徴とする。木本花粉は、下位試料に多く認められた河畔林・林縁要素が減少し、ブナ属が多産する。ブナ属は、コナラ亜属等とともに冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素であることから、周辺の山地や丘陵に分布した森林植生を反映していると考えられる。また、遺物包含層上部（f 層：試料番号 4）は、珪藻分析結果から好気的環境な場所がある湿地と想定された。草木花粉は、遺物包含層下部（f 層：試料番号 6）と同様に水湿地生草本（ガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、イボクサ属等）や多産したイネ科、カヤツリグサ科、セリ科の一部が周辺の湿地に生育しており、やや乾いた場所などにサンエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属等が生育していたと考えられる。なお、小溝試料（SD19：試料番号 3 U）は、木本花粉組成およびイネ科の多産などの特徴から、1 G 東壁の遺物包含層上部（f 層）に対比されると考えられる。

1 G 東壁の遺物包含層より上位に相当する層準（d 層：試料番号 1）は、再び木本花粉の出現率が高くなる。ただし、遺物包含層下部（f 層：試料番号 6）や南壁の試料番号 2 とは群集組成が異なる。木本花粉では、マツ属とブナ属が多産し、モミ属、ツガ属、トウヒ属等の針葉樹を作り一方、f 層で比較的高い出現率を示したハンノキ属は産出しなかった。花粉化石の保存や産出状況が他の試料に比べて悪いものの、ハンノキ属やこの他の河畔林および林縁要素を含む分類群の減少が特徴的であり、周辺に分布した林分が減少したことなどが推定される。一方、多産したマツ属は、生育環境の適応範囲が広く、伐採地や崩落地などに先駆的に進入する種類であることから、周囲にマツ属からなる二次林が増加した可能性がある。

### （3）栽培植物

生産遺構の可能性がある SD19 褐土からは、栽培種のイネ属花粉が産出し、イネ科花粉中に占める割合は約 22% を示した。同層準に対比されると考えられる 1 G 東壁の f 層上部からもイネ属が産出しており、その割合は約 37% を示した。また、イネ属は 1 G 南端試料を除く各試料からも検出されたが、産出個体数が少ないため厳密な比較には至らない。中村（1980b）によれば、現在の水田における調査事例から、イネ属の割合が 30% 以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稻作が行われていたとみなせると述べている。今回の結果から、9 世紀頃には近傍で稻作が行われていたことが推定される。なお、SD19 における栽培植物については、イネ属の産出に特異な状況が見出せないことや、この他の栽培種や栽培種を含む分類群は検出されなかったため、詳細な検討には至らない。

## 第VI章 まとめ

今回の調査によって検出した遺構の多くは溝状遺構であり、そのほかに土坑や自然流路跡を確認した。数条の溝状遺構が平行に並んでおり、畠の設立て跡の可能性がある。確認調査では柱穴と見られるビットを検出しているが、今回の調査範囲では柱穴跡や竪穴住居跡などは確認されなかった。遺物は、9世紀後半から10世紀初頭に位置づけられる須恵器、土師器や木製品が出土している。須恵器には転用硯や漆が付着するものが少量含まれる。

本遺跡周辺は、猿橋川などの中小河川が合流する地点であり、かつては八丁沖と呼ばれる低湿地があつた地域である。東方には五百刈遺跡、西方には官田遺跡が所在し、いずれも9世紀後半の遺物を出土している。一方、八丁沖の北岸には、9世紀後半の遺物を出土する見附市上田遺跡が所在する。上田遺跡は木簡や大量の墨書き・漆書き土器が出土しており、内水面及び河川を利用した物資の集積場と考えられている（見附市教委 2005）。抜間遺跡と上田遺跡とは様相が異なるが、ほぼ同時期に、八丁沖を挟む南端と北端において遺跡が存在していたことが明らかとなったと言える。八丁沖を囲むこれらの遺跡がどのような関係を有していたのかは、今後の検討課題である。

## 参考文献

- 長岡市 1992 「長岡市史」資料編1 考古  
長岡市教育委員会 2002 『長岡市内遺跡発掘調査報告書—千代栄町地区—』  
長岡市教育委員会 2006 『平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』  
長岡市教育委員会 2010 『大原C遺跡』  
見附市教育委員会 2005 『上田遺跡』
- （第V章自然科学分析 引用文献）
- Asai, K. and Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saproxylic and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.  
安藤一男 1990 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.  
伊藤良永・堀内誠示 1991 疣生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.  
小杉正人 1988 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.  
中村 純 1974 イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, 187-193.  
中村 純 1980a 日本産花粉の標識 I II (国版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.  
中村 純 1980b 花粉分析による耕作史の研究. 自然科学的手法による遺跡・古文化財等の研究 一総括報告書一, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.  
島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.

第1表 遺物観察表

## (1) 土器

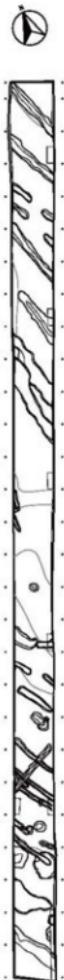
図版 No.	遺物 No.	出土位置			種別	石材	法量 (cm) ※最大値			調査	回転 方向	備考		
		グリッド	遺構名	層位			長さ	幅	厚さ					
8	1	7	SX03	フク土 士師部 磨	35.8		3	中中粗	赤、砂	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
8	3	22	SX03	フク土 上脚部 長楕				中中粗	赤、砂	灰/灰	平行タタキ	同心円当て真似		
8	4	27	SX03	フク土 振面部 破	11.8		5	中中粗	石、白	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
8	5	4	SX03	フク土 振面部 斜面部	11.0	7.5	3.0	8	中中粗	灰、白、黒	ロクロナダ	ロクロナダ	不明 底: 鋸形へラ切り ケズリ	
8	6	4	SX03	フク土 振面部 裂				中中粗	白、黒	灰/灰	平行タタキ	同心円当て真似 内: 焼きくくれあり		
8	T	4	SX03	フク土 上脚部 小楕		7.3		中中粗	砂	灰/灰			内: 摩耗	
8	E	4	SX03	フク土 士師部 裂 (14.8)			4	中中粗	砂	灰/灰			内外: 摩耗	
8	B	4	SX03	フク土 上脚部 長楕				中中粗	石、赤、砂	灰/灰	平行タタキ 方角付	古木目	内: 一部焼化物付着	
8	10	4	SX03	フク土 振面部 無台所	11.3	7.6	3.2	3	中中粗	石、白、黒、赤	灰/灰	ロクロナダ		
8	11	4	SX03	フク土 上脚部 裂	15.4			4	中中粗	赤、砂	灰/灰	ロクロナダ	カタ目 内: 二重脚 体: カキ目、ハケ	
8	12	4	SX03	フク土 上脚部 小楕	9.5		13	中中粗	赤、白、黒	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
9	13	11	SX03	フク土 振面部 無台所	18.4		3.0	30	中中粗	灰、白、黒	ロクロナダ	ロクロナダ	外: 繊維「口」	
9	14	14	SX03	フク土 上脚部 破	18.2	8.0	5.1	2	中中粗	灰、白、黒、砂	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	右: 繊維へラ切り
9	15	2	SX03	フク土 振面部 斜面	15.2			4	中中粗	白	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
9	16	1	SX03	フク土 振面部 斜面	12.0		3.0	12	中中粗	赤、白、黒	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	外: 燃えあり 内: 大きい
9	17	1	SX03	フク土 振面部 有台所	11.8	7.6	3.6	2	中中粗	白	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	不明 高: 繊維へラ切りか→ ナゲ
9	18	1	SX03	フク土 振面部 有台所	11.2	5.4	5.3	1	中中粗	赤、白、黒	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	左: 繊維へラ切り
9	19	1	SX03	フク土 振面部 無台所	12.0	8.3	2.9	6	中中粗	白、黒	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	不明 高: 繊維へラ切り
9	20	1	SX03	フク土 振面部 無台所	12.2	8.0	3.5	3	中中粗	灰、白、黒	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	底: 繊維へラ切り 内: 口縫織縫付着 外: 繊維へラ切り
9	21	1	SX03	フク土 上脚部 破	12.6	7.0	3.7	26	中中粗	石、砂	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	右: 繊維へラ切り
9	22	1	SX03	フク土 上脚部 小楕	13.8	7.6	11.2	6	粗	赤、砂	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	
10	26	11	三	振面部 無台	16.0		3.2	28	中中粗	赤、白、黒	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	外: 繊維あり
10	27	20	三	振面部 裂				中中粗	赤、砂	灰/灰	豪子タタキ+平行筋	平行筋て真似		
10	28	34	三	振面部 裂				中中粗	赤、白、黒	灰/灰	豪子タタキ+平行筋	同心円当て真似 底: ナゲ		
10	39	23	三	士師部 小楕		8.0		9	粗	赤、砂	灰/灰	ハケ 底: ナゲ	ロクロナダ	
10	30	13	三	士師部 両側 (H.6)			5	中中粗	石、赤、砂	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ		
10	31	13	三	士師部 長楕	22.5		7	中中粗	赤、砂	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	体: カキ目 カキ目	
10	32	13	三	士師部 長楕 (GT.8)			1	中中粗	砂	灰/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	底: ナゲ	
10	33	11	三	士師部 磨	26.0			15	中中粗	骨、赤、砂	灰/灰	ロクロナダ	ロ: ナゲ 体: カキ目 ケズリ	外: 煙付着

## (2) 石製品

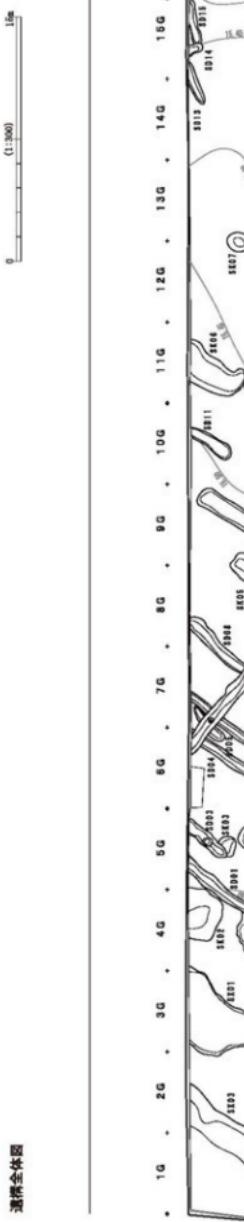
図版 No.	遺物 No.	出土位置			種別	石材	法量 (cm) ※最大値			重量 (g)	備考
		グリッド	遺構名	層位			長さ	幅	厚さ		
8	2	11	SD12	フク土 石製品	安山岩		8.1	5.6	4.7	152.5	

## (3) 木製品

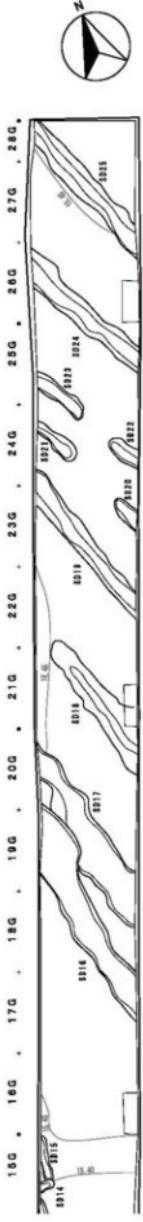
図版 No.	遺物 No.	出土位置			種別	石材	法量 (cm) ※最大値			木取	備考
		グリッド	遺構名	層位			長さ	幅	厚さ		
9	23	1	SX03	フク土 曲物底板	17.9	6.8	0.6			框目	左右切損
9	24	1	SX03	フク土 杭	21.7	3.8	4.2			芯持丸太	皮つき、上部切損、はつり痕あり
9	25	1	SX03	フク土 鋼	35.6	9.6	1.6			框目	左半部折損



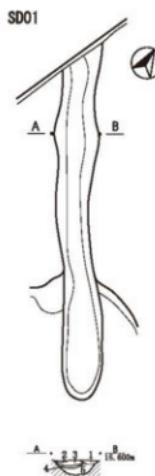
遺傳全體圖



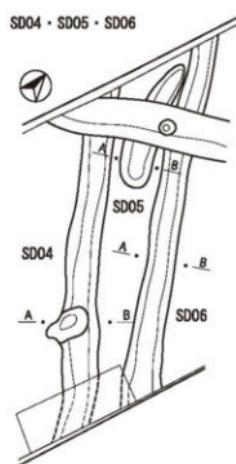
分割图(1)



分割图(2)



- 1 暗灰色粘土+黄褐色シルト
- 2 1と同様
- 3 黄褐色粘土+灰褐色粘土
- 4 灰褐色粘土+黄褐色粘土 漢化物を少量含む
- 5 黄褐色粘土+灰褐色粘土 漢化物を少々含む



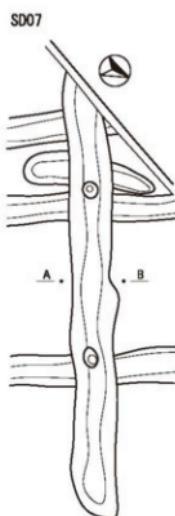
- 1 灰褐色粘土+黄褐色粘土 漢化物を少々含む
- 2 黄褐色シルト+灰褐色シルト



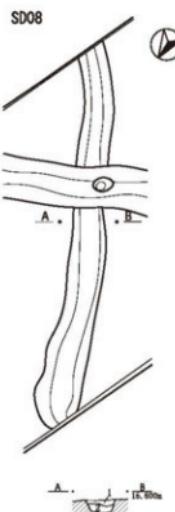
- 1 灰褐色粘土+黄褐色シルト 漢化物を少量含む
- 2 黄褐色シルト+灰褐色シルト 漢化物を少々含む



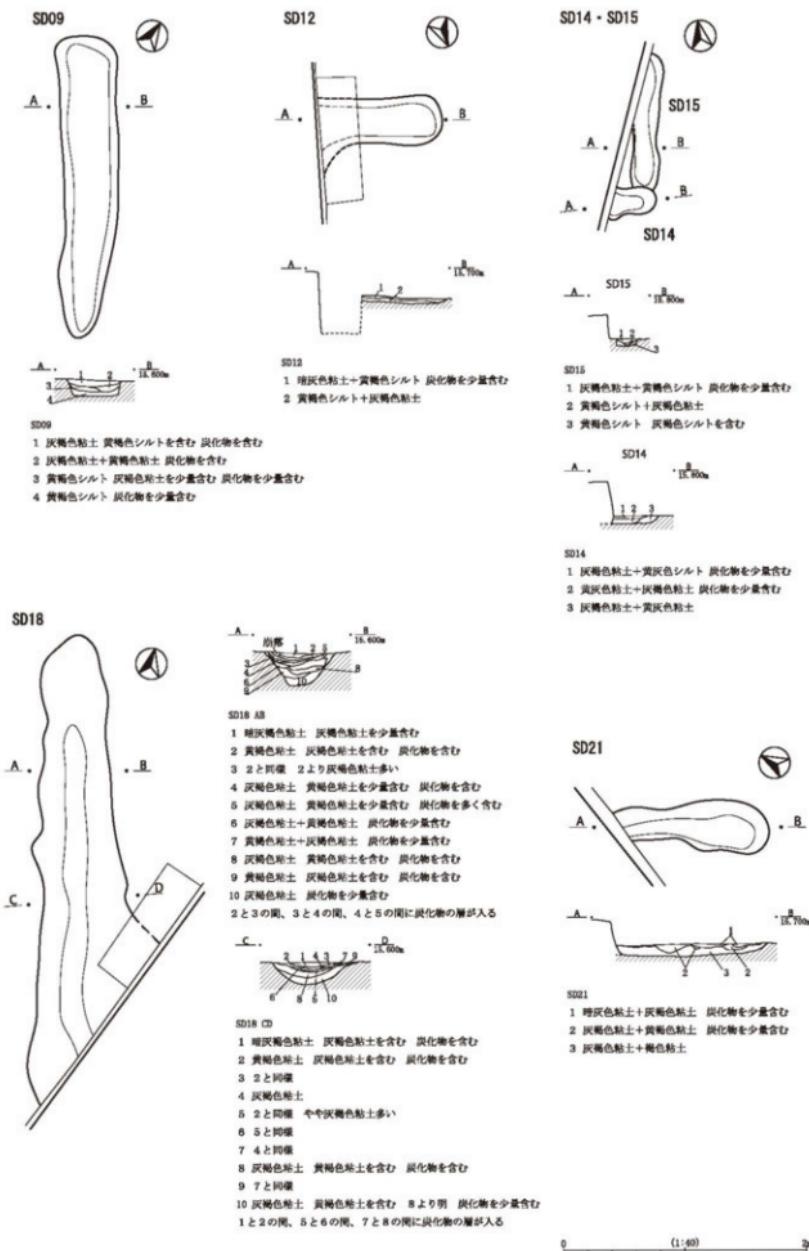
- 1 灰褐色シルト+黄褐色シルト 漢化物を多く含む
- 2 黄褐色シルト+灰褐色シルト 漢化物を少々含む
- 3 黄褐色シルト+灰褐色シルト
- 4 灰褐色シルト+黄褐色シルト 漢化物を含む



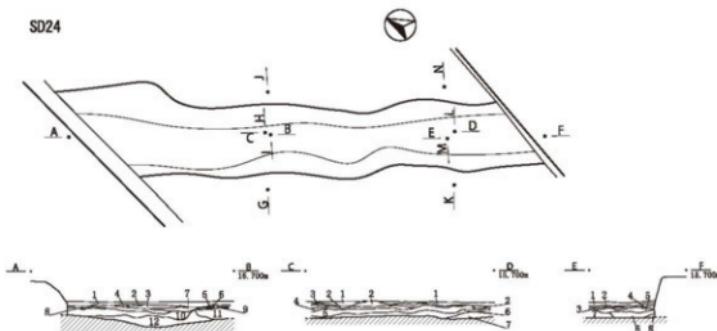
- 1 黄褐色粘土+黄褐色シルト 漢化物を含む
- 2 灰褐色粘土 黄褐色シルトを少量含む 漱化物を含む
- 3 黄褐色シルト
- 4 灰褐色粘土 漱化物を少々含む
- 5 黄褐色シルト 漱化物をごく少々含む



- 1 灰褐色粘土+黄褐色シルト 漱化物を少量含む
- 2 黄褐色シルト+灰褐色シルト



SD24



SD24 GH

- 1 暗灰褐色粘土 灰褐色粘土を含む 岩化物を少量含む
- 2 黄褐色粘土+暗褐色粘土 岩化物を含む
- 3 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を含む
- 4 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む
- 5 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む
- 6 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を少量含む
- 1と2の間、2と3~5の間。
- 3~4と5と6の間に岩化物の層が入る

- SD24 IJ
- 1 暗灰褐色粘土 灰褐色粘土を含む 岩化物を少量含む
  - 2 黄褐色粘土+暗褐色粘土 岩化物を含む
  - 3 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を含む
  - 4 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を多く含む
  - 5 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を含む
  - 6 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む

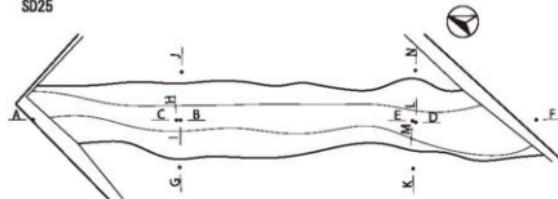
SD24 KL

- 1 暗灰褐色粘土 灰褐色粘土を含む 岩化物を少量含む
- 2 黄褐色粘土+暗褐色粘土 岩化物を含む
- 3 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を多く含む
- 4 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を含む
- 5 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を含む
- 6 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を少量含む

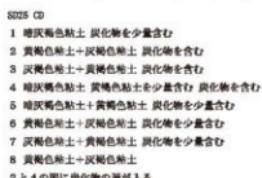
SD24 MN

- 1 暗灰褐色粘土 灰褐色粘土を含む 岩化物を少量含む
- 2 黄褐色粘土+暗褐色粘土 岩化物を含む
- 3 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む
- 4 灰褐色粘土 黄褐色粘土を少量含む

SD25



SD25 AB



SD25 CD

- SD25 EF
- 1 線状褐色粘土 岩化物を少量含む
  - 2 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を含む 黄褐色粘土多い
  - 3 線状褐色粘土 黄褐色粘土を少量含む 岩化物を含む
  - 4 線状褐色粘土 黄褐色粘土を少量含む 岩化物を含む
  - 3より黄褐色粘土少ない
  - 5 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む
  - 6 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む

SD25 GH

- SD25 GH
- 1 線状褐色粘土 岩化物を少量含む
  - 2 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を含む
  - 3 黄褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を含む
  - 4 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む
  - 5 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む

SD25 IJ

- SD25 IJ
- 1 線状褐色粘土 岩化物を少量含む
  - 2 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を含む
  - 3 線状褐色粘土 黄褐色粘土を少量含む 岩化物を含む
  - 4 灰褐色粘土 黄褐色粘土 岩化物を少量含む

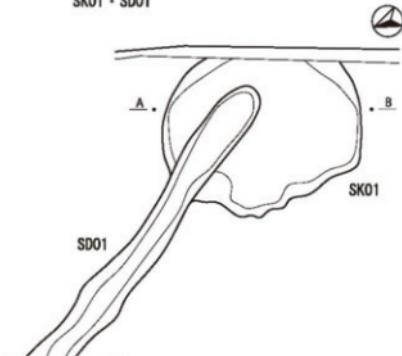
SD25 KL

- SD25 KL
- 1 線状褐色粘土 黄褐色粘土を少量含む 岩化物を含む
  - 2 線状褐色粘土 黄褐色粘土を少量含む 岩化物を含む 1より黄褐色粘土少ない
  - 3 灰褐色粘土+黄褐色粘土 岩化物を少量含む

SD25 MN

- SD25 MN
- 1 黄褐色粘土+灰褐色粘土 岩化物を含む
  - 2 線状褐色粘土 黄褐色粘土を少量含む 岩化物を含む
  - 3 黄褐色粘土+灰褐色粘土

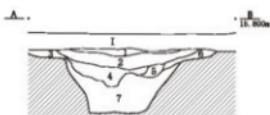
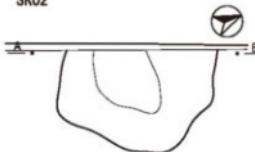
SK01・SD01



SK01

- 1 黄褐色粘土+黄褐色シルト 炭化物を多く含む
- 2 黄褐色粘土+黄褐色シルト 1より黄褐色シルト多い 炭化物を含む
- 3 黄褐色シルト 黄褐色粘土を含む 炭化物を含む
- SD01
- 4 黄褐色粘土 黄褐色シルトを含む 炭化物を含む
- 5 黄褐色粘土+黄褐色粘土 炭化物を少量含む
- 6 黄褐色粘土+黄褐色粘土
- 7 黄褐色シルト+黄褐色粘土 炭化物を少量含む

SK02



SK02

- 1 灰褐色粘土 やや青味がかる 炭化物を含む
- 2 灰褐色粘土 黄褐色粘土を含む 炭化物を多く含む
- 3 灰褐色粘土 黄褐色粘土を含む 炭化物を含む
- 4 灰褐色粘土+黄褐色シルト 炭化物を多く含む
- 5 黄褐色シルト+青灰褐色シルト 炭化物を含む
- 6 黄褐色シルト+灰褐色粘土
- 7 黄褐色シルト+青灰褐色シルト+灰褐色粘土 炭化物を含む

SK04



SK04

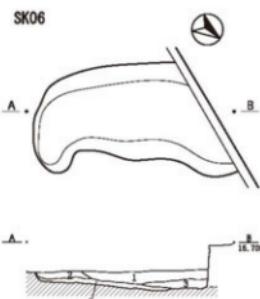
- 1 緑灰色粘土+黄褐色シルト 炭化物を多く含む
- 2 1と層厚 1より炭化物少ないと
- 3 墓灰色粘土+黄褐色粘土 炭化物を少々含む
- 4 黄褐色シルト+墓灰色粘土

SK05

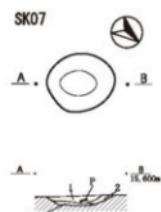


SK05

- 1 墓灰色粘土+灰褐色粘土 炭化物を含む
- 2 灰褐色粘土 墓灰色粘土を少々含む 炭化物を含む
- 3 黄褐色シルト
- 4 黄褐色シルト 断崖層
- 5 黄褐色シルト 断崖層 4よりやや暗

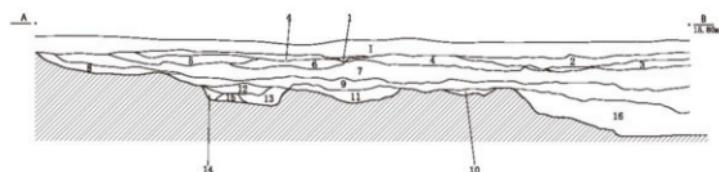
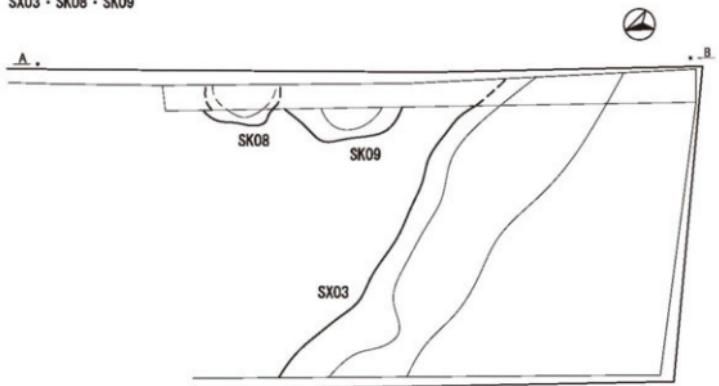


- SK06  
 1 増灰褐色粘土 黄褐色シルトを少量含む 炭化物を含む  
 2 増灰褐色粘土 黄褐色シルトを含む 炭化物を少量含む  
 3 黄褐色粘土 炭化物を少量含む  
 4 黄褐色粘土 炭化物をごく少量含む



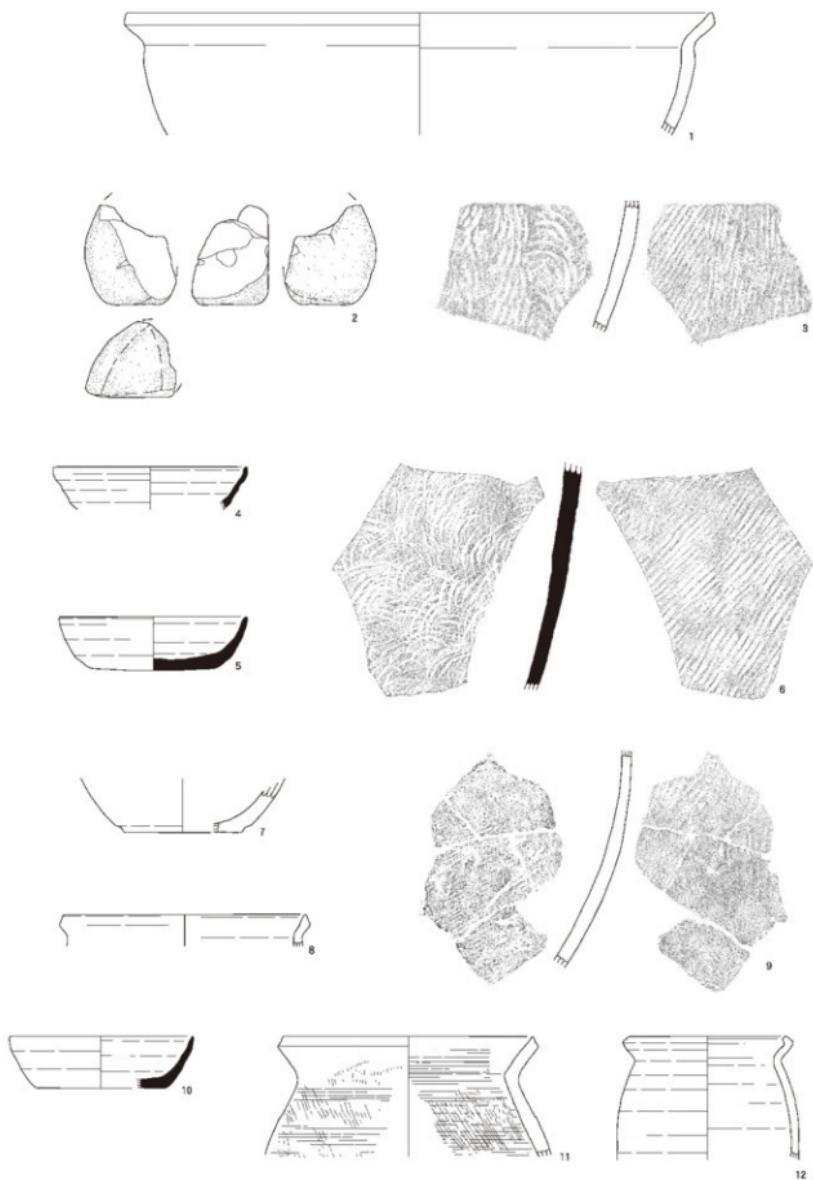
- SK07  
 1 増灰褐色粘土+黄褐色シルト 炭化物を少量含む  
 2 増灰褐色粘土 黄褐色シルトを少量含む  
 3 灰褐色粘土

## SX03・SK08・SK09



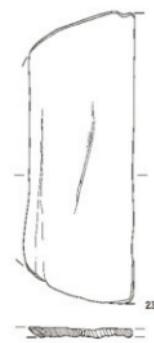
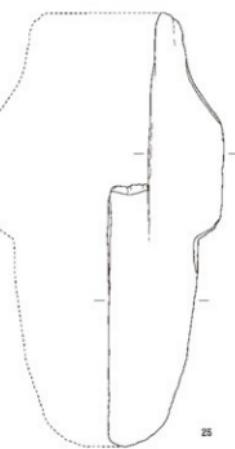
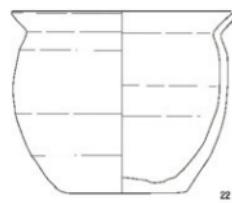
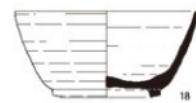
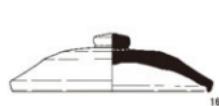
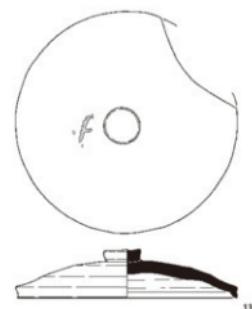
- 1 黑褐色粘土、灰褐色粘土  
 2 增灰褐色粘土 灰色粘土を少量含む  
 3 增灰褐色粘土 青灰色粘土を少量含む  
 4 灰色粘土+灰褐色粘土  
 5 灰褐色粘土+灰色粘土  
 6 增灰褐色粘土 灰色粘土を少量含む  
 7 增灰褐色粘土  
 8 黑褐色土+黄褐色粘土 炭化物を含む  
 9 灰色粘土 炭化物を含む  
 10 增灰褐色粘土+灰色粘土 炭化物を少量含む  
 SK09  
 11 增灰褐色粘土 炭化物を含む  
 SK08  
 12 灰色粘土+灰褐色粘土  
 13 增灰褐色粘土 炭化物を含む  
 14 增灰褐色粘土 炭化物を含む  
 15 黄褐色粘土  
 SX03  
 16 增灰褐色粘土+青灰色粘土 炭化物、植物遺体を含む

0 100m (1:100)

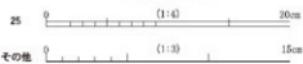


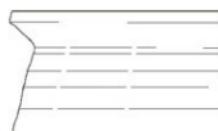
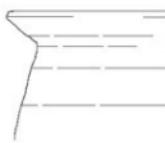
(1 : SD07, 2 : SD12, 3 : SD19, 4 : SD25)  
 (5 ~ 9 : SK01, 10~12 : SK02)

0 (1:2) 15cm



(13・14: SK05, 15: SK09)  
(16~25: SK03)





26 0 (1:4) 20cm  
その他 0 (1:3) 15cm

(26~33: 遺構外)



抜間遺跡全景（南から）



完掘状況（南東から）



SD01セクション（東から）



SD04～SD08完掘状況（北東から）



SD12セクション・遺物出土状況（北から）



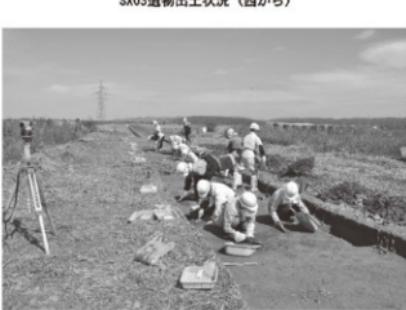
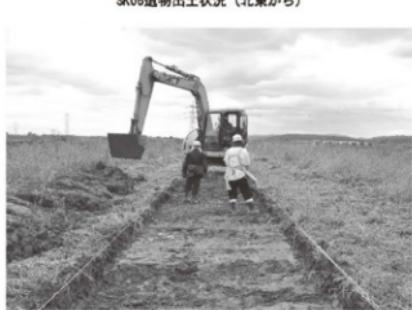
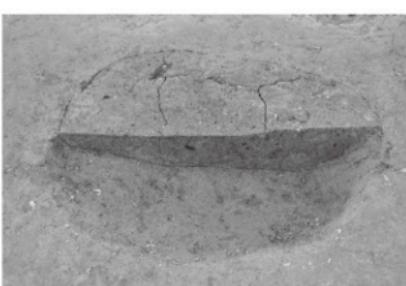
SD18セクション（CD ライン）（南東から）

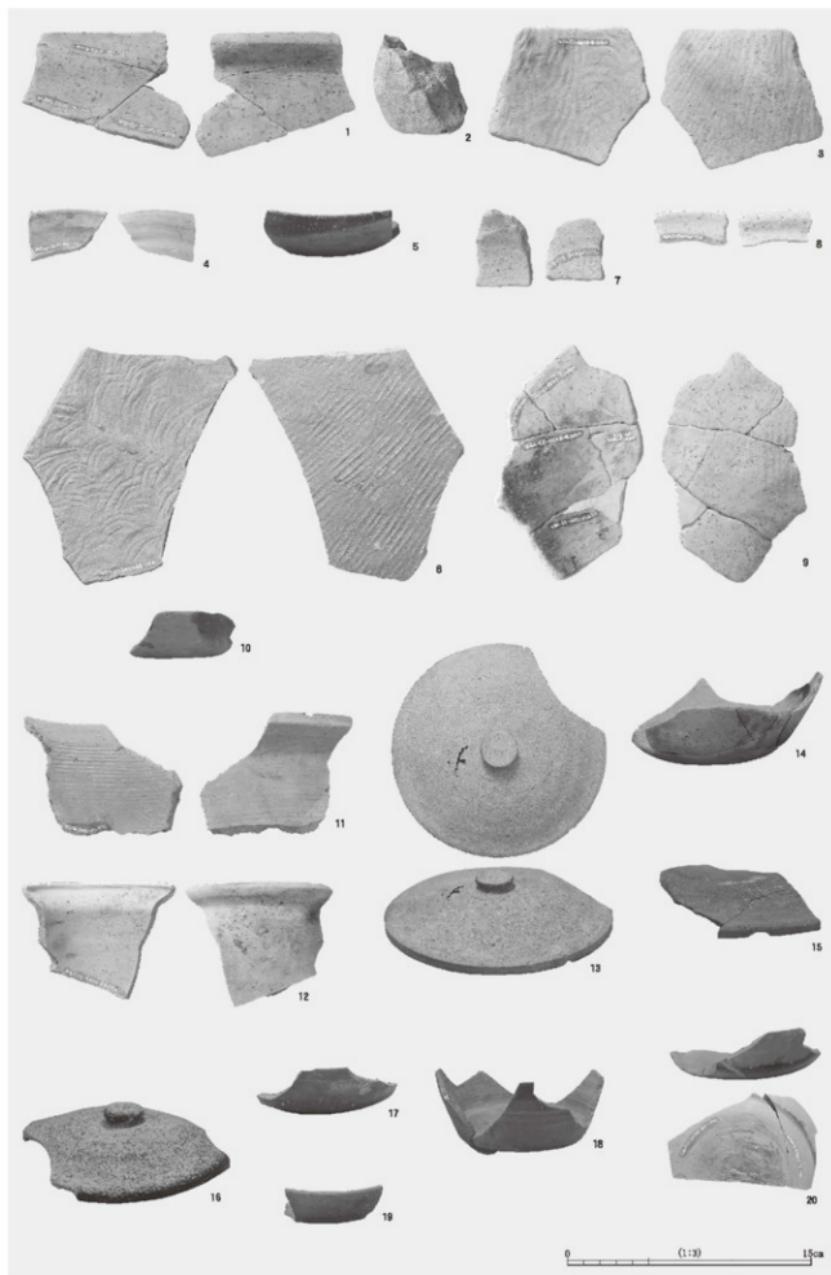


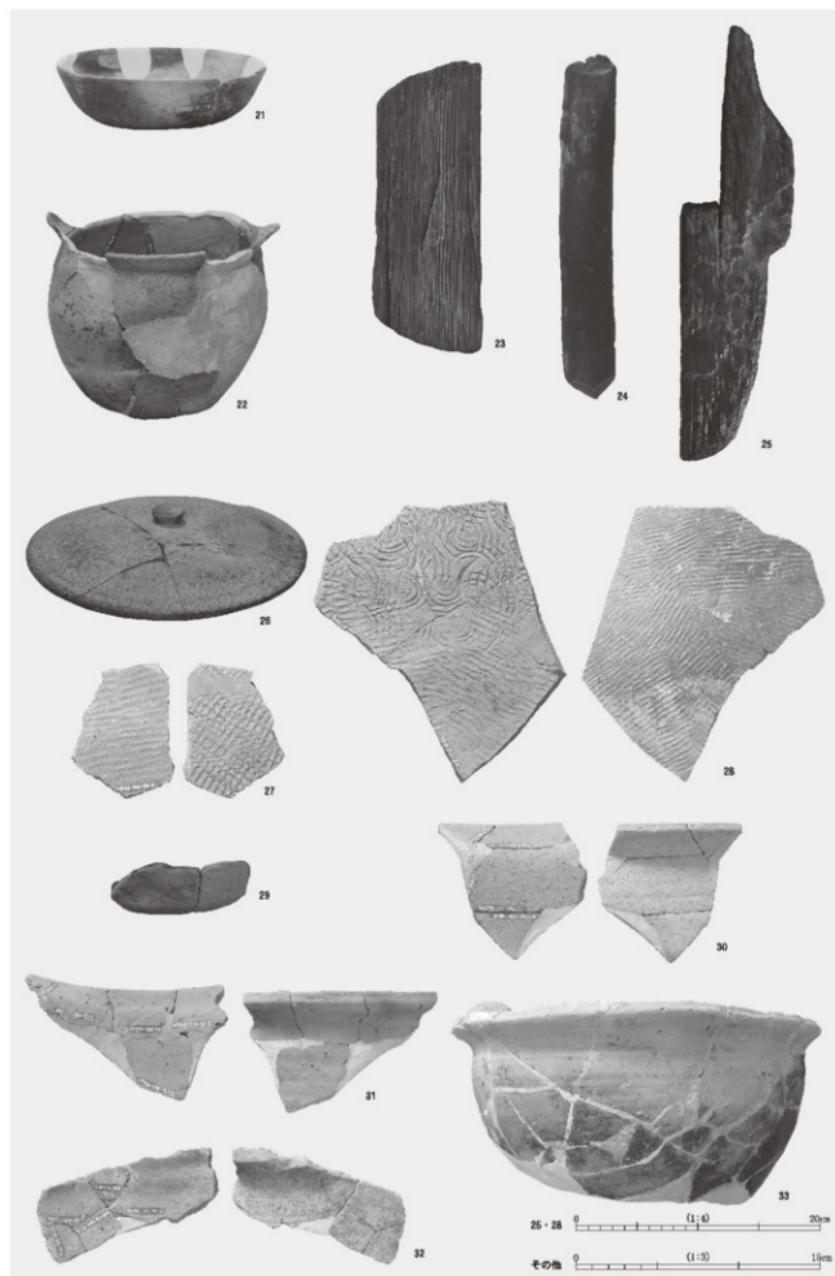
SD24セクション（EF ライン）（南から）



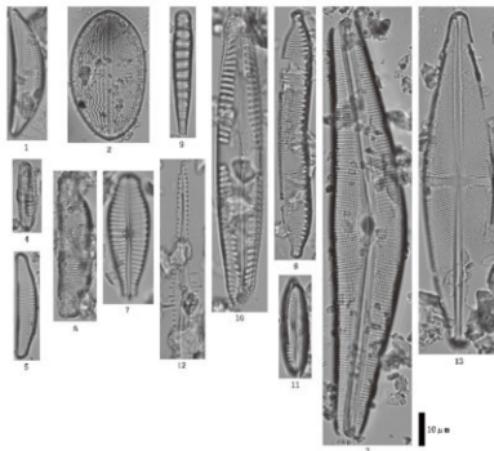
SD24完掘状況（東から）





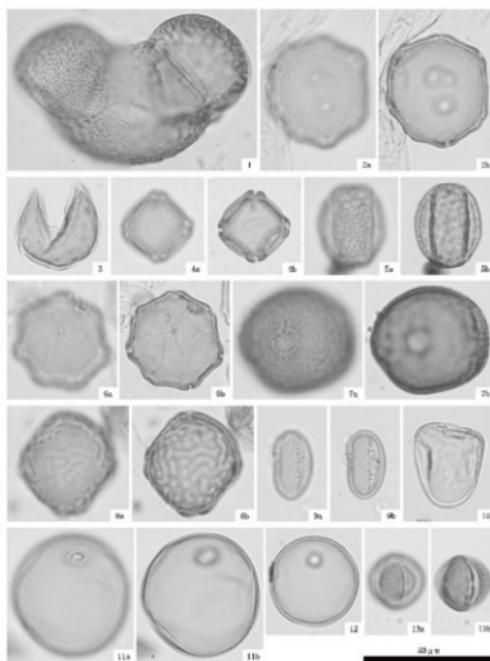


## 珪藻化石



1. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kreutz) Van Heeck (16東壁: 4)
2. *Cocconeis placentula* var. *linosa* (Ehr.) Cleve (16東壁: 1)
3. *Cymbella acerosa* (Ehr.) Cleve (16東壁: 1)
4. *Reimria sinuata* (Grev.) Kociolek et Stoermer (16東壁: 1)
5. *Eunotia pectinata* var. *minor* (Kutz.) Rabenhorst (16東壁: 6)
6. *Eunotia praeputia* Ehrenberg (16東壁: 1)
7. *Gomphonema angustatum* (Kutz.) Rabenhorst (16東壁: 2)
8. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (16東壁: 4)
9. *Merdion circula* var. *constrictum* (Ralfs) Van Heeck (16南壁: 2)
10. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (16東壁: 4)
11. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer (16東壁: 1)
12. *Pinnularia* spp. (16東壁: 1)
13. *Staurois phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (16東壁: 4)

## 花粉化石



1. マツ属 (16東壁: 4)
2. クルミ属 (16南壁: 2)
3. スギ属 (16東壁: 4)
4. ハンノキ属 (16南壁: 2)
5. ロウジクイロボク属 (16東壁: 4)
6. サワグルミ属 (16南壁: 2)
7. ブナ属 (16東壁: 4)
8. ニレ属 - ケヤキ属 (16南壁: 2)
9. トチノキ属 (16南壁: 2)
10. カヤツリグサ科 (16東壁: 4)
11. イネ科 (16東壁: 4)
12. イネ科 (16東壁: 4)
13. ヨモギ属 (16東壁: 4)

## 報告書抄録

ふりがな	のげまいせき							
書名	抜間遺跡							
副書名	県営経営体育成基盤整備事業（富島地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鳥居美栄							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0084 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2015年3月18日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
抜間遺跡	新潟県長岡市 宮島町字抜間	15201	610	37° 28° 47°	138° 53° 38°	20130926 ～ 20131005	132m <sup>2</sup>	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構		主な遺物		特記事項	
抜間遺跡	遺物包含地	平安時代	溝状造構 土坑 自然流路		土師器 須恵器 木製品		なし	

### 抜間遺跡

県営経営体育成基盤整備事業（富島地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27（2015）年3月18日 印刷

平成27（2015）年3月18日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 あかつき印刷株式会社